

週刊社会保障

June 2014 Volume68

No.2782

6.30



社保審・医療保険部会(記事6頁)

■ 特集 1

傷病手当金等の見直しに多数の委員が賛意を示す
— 社保審・医療保険部会で給付の効率化等を議論 —

■ 特集 2

効率的かつ一体的に医療・介護の提供体制構築を
— 医療・介護総合確保推進法案が可決・成立 —

クローズアップ

- ①厚労省提出の9法案成立(通常国会閉会)
- ②ストレスチェック制度を創設(安衛法改正)
- ③超党派で社会保障を議論(国会議員連盟)

解説 平成26年度診療報酬改定⑦

在宅療養後方支援病院の新設や不適切な訪問診療等への対策を実施

論 壇 クリエイティブなケア実践の時代へ
—「ケアの六次産業化」という視点—

飯田 大輔

時事評論 後発医薬品使用促進

武藤 正樹

論壇

クリエイティブなケア 実践の時代へ

「ケアの六次産業化」という視点へ

千葉大学福祉環境交流センター 研究員 飯田 大輔

はじめに

介護分野の人材不足が深刻さを増している。2025年までに、新たに100万人の担い手を確保しなければならぬというのに、離職率も、有効求人倍率も高い状況が続いている。そして、いまだに介護を含む「ケア」労働は、あまり裁量の余地のない単純労働のように考えられている傾向にあるが、はたしてそうだろうか。私はむしろ、ケア(介護・看護)のもつ、クリエイティブティ(創造性)に注目すべきだろうと考えている。私は、介護職自身が、ケアに内在するクリエイティブティを認識し、発揮していくこと

は、介護という仕事の社会的評価の見直しにもつながって、介護報酬の見直しや、待遇改善へのヒントが得られると期待している。本稿ではこうしたテーマについて幅広い観点から考察してみたい。

クリエイティブティに 注目するわけ

F・ナイチンゲールは、看護は「新しい芸術であり、新しい科学でもある」と宣言している(ナイチンゲール1974)。これは、ケアが、科学(近代科学)としての側面と、クリエイティブな側面の両方をもっていることを指している。これまでのケアは、その「科学」としての側面に焦点をあててきたと言えるだ

ろう。1974年に出版された「科学的看護論」(薄井坦子著)は、看護師不足や待遇の低さが社会問題となっていた時代背景のなかで、看護を「科学」として確立させ、「専門性」が高い仕事であることを示し、看護の社会的評価の向上を実現してきた。そして、近年では介護施設の団体などからも介護の「科学的実践」の必要性が強調され、ケアの科学的な側面が注目される傾向がある。ケアの科学的な側面は、生理学的根拠に基づいたケア実践や、経験的な合理性を追究するものである。そして、人体の構造や機能などにその根拠を求める。これはケアに高度な知識が必要であることを示している。そして、これからのケアは、ケアの「科

学」としての側面を理解したうえで、ケアのもつクリエイティブティに焦点をあてていくことが重要と思われる。それは、ケアという概念をとらえなおす新しい視座を示すものとなり、ケアの「おもしろさ」を伝えていく原動力となる。

ケア概念の広がり

介護保険がはじまってからは、ケアをめぐる議論はさらに活発になっていくが、その多くは各領域の専門性がどこにあるかという議論や、サービス提供の方法にかかわるものである。そして、これからケアをめぐる議論の中心は、一対一のケアに立脚していると言っていいたい。しかし、今日では、たとえば終末期ケアにおいて、介護職は「死」と向き合うことが求められる、それは、対象者だけではなく、家族や住まい、コミュニティ、宗教といった広がりをもつて展開されていく。広井は、ケアについて一対一モデルで議論するには限界があり、コミュニティという視点を抜きにして考えることはできないと指摘している(広井2009)。

こうした点を理解すれば、福祉施設は閉じた空間ではなく、開かれた空間になる必要がある、それは地域において「シエ

アされる空間」になることを意味する。また、介護職員は、一対一のケアにとどまらない広い視野をもつてのケア提供や、地域の課題解決を考えていく必要がある、それは介護職が地域で「シエアされる人材」になっていくことを意味する。福祉施設と介護人材のあり方が大きく変わっていくことになる。

これらの議論は、個人のQOLから地域のQOLを問う時代へのシフトを意味するのであるが、その実現のためには、ケアをするためのコミュニティという関係性だけでなく、コミュニティ自体もまたケアされる対象であり、そうしたケアとコミュニティを橋渡ししていく役割として介護・福祉職が期待されることになる。

事例・恋する豚研究所 の取り組み

恋する豚研究所は、千葉県香取市にある社会福祉法人福祉楽団が運営する障害者の就労継続支援A型施設である。障害者らが豚肉の加工やスライスをを行い、その製品を販売し、豚肉と地元の農産物を使ったレストランを営んでいる。養豚や農業という地場産業と福祉を組み合わせ、さらに多様なクリエイイターと協働す

る新しい取り組みである。千葉県の東部は全国でも有数の養豚地帯だったが、飼料価格の高騰や輸入豚肉の広がりや廃業が相次いでいる。さらに障害者の賃金も全国平均で月給1万9千円ほどにとどまり、最低賃金が保障されていない。そこで、地元の豚を独自のブランドとして再構築し、新たな販路を開拓することができれば、地域経済の活性化とともに、障害者に「きちんとした給料」を払える仕組みができるのではないかと考えたのである。

福祉楽団が福祉事業として豚肉を売るのは初めてだし、ハムやソーセージも作ったことはない。そこで、日本大学の生物資源科学部と産学連携協定を締結し、食肉加工を学び、いまは、社会福祉士の資格を持つ職員が、工場内で障害者と一緒にハムをつくっている。良い製品ができて、売れる仕組みをつくるのは容易ではない。営業の責任者として、大手健康食品会社の営業経験を持つ28歳の職員を採用した。ターゲットとする消費者層を絞り込み、「東急東横線沿線に住んでいるような30代の働く独身女性」を照準とし、「豚も恋をすればおいしくなるのではないか」という思いから「恋する豚」と名付けることに決まった。そし

表1 近代科学とクリエイティビティの対比

近代科学	クリエイティビティ
コントロール	相互作用
対象の制御	対象との対話
再現可能性	一回性
要素還元	全体性
結果重視	過程重視

近代科学とクリエイティビティについて対比すると表1のように整理できる。ケアは対象との相互作用であり、同じ条件、状況下であっても全く同じケアというものは再現できない。また、「良いケア」は、その行為を分解していても説明は難しく、ある意味、ほんやりとしたその行為の「全体」として認識される。そして、長期の関係のなかで醸成されていくので、結果の評価が難しく、「過程」

が、さらに重要なのは、クリエイターという「ヨソ者」がかかわることによって「ソト」の接点が生まれ、それは従来の福祉という概念そのものを変えていく可能性がある。あるということだ。これらは「市場」によってすべてを解決しようと考えているわけではなく、これまで閉鎖的だった福祉を「ソト」とつなげ、一歩だけ「市場」に近づけていこうとする事業である。さらに付言しておく、恋する豚研究所には多くの人々が食事や買い物に訪れているが、多くの人は福祉施設であることを知らない。

生み出すようなイメージを持たれる人もいるかも知れないが、必ずしもそうではない。文化人類学者のレヴィ・ストロースは、あり合わせのものをうまく使って、自分の手でものをつくる仕事を「ブリコラージュ」と呼んだが、これはまさしくクリエイティビティをめぐる議論にリンクする(レヴィ・ストロース1976)。アメリカの都市経済学者のリチャード・フロリダは、クリエイティビティを發揮するには長い時間を要するとしている。つまり、「ひらめき」というのは、突然でてくるものではなく、長期間準備し試行錯誤した結果だと言える。そして彼は、成熟した社会において、若者は給与よりも、職務内容や職場環境のほうが重要であると考えており、クリエイティブでおもしろいという内発的報酬があることが重要であると指摘している(リチャード・フロリダ2008)。

これらは次のように整理できる。
 ①クリエイティビティが発揮されるには長期の時間を要する。
 ②「人と人」や「人と社会資源」などを結び付ける能力が求められる。
 ③「遊び」と「仕事」が奇妙に混じり合った要素を持ち、内発的な動機(非金銭的な動機)をもって展開されていく。
 近代科学とクリエイティビティについて対比すると表1のように整理できる。ケアは対象との相互作用であり、同じ条件、状況下であっても全く同じケアというものは再現できない。また、「良いケア」は、その行為を分解していても説明は難しく、ある意味、ほんやりとしたその行為の「全体」として認識される。そして、長期の関係のなかで醸成されていくので、結果の評価が難しく、「過程」

が重視されると言える。言うまでもないが、ケアの科学的側面と、クリエイティブな側面は不可分一体のものであり、クロスしながら展開されていく。
ケアの六次産業化という視点
 ケアのもつクリエイティビティに注目していくことが重要であると指摘してきた。ここでは、介護職がクリエイティブなケアを実践していくための基本的な考え方として「ケアの六次産業化」を提唱したい。

この六次産業化の動きにヒントを得たものである。農家が、作物の栽培や収穫(第一次産業)だけでなく、それを加工し(第二次産業)、販売、レストランの運営など(第三次産業)を一貫して行うことから、「1+2+3」産業を意味して、六次産業化と呼ばれている。しかし、この六次産業化という概念には限界がある。私の祖父は、自分で大豆を栽培し味噌をつくらせていたし、米から餅をつくり、さらに煎餅もつくっていた。また、それらを農家が行商として売って歩く人も多く見られた。つまり一昔前の農業は六次産業の姿が当たり前だった。それが、社

て、建築家や、デザイナー、写真家などのクリエイターを巻き込みながら、プロジェクトは進んでいく。
 こうした、恋する豚研究所の特長は、大きく三つあると言える。
 一つ目は、パンやクッキー、ジャムといった、「どこにでもある」仕事ではなく、地場産業と福祉を結びつけている点である。そうすることで、地元との関係性は広がり、施設の中で障害者雇用が完結することはなく、サツマイモの収穫や里山の保全などの作業も行っている。
 二つ目は、福祉を名乗らない販売戦略である。製造加工は、すべて社会福祉法人で行っているのだが、製品はすべて「株式会社恋する豚研究所」が買い取り、販売している。障害者がつくったことを売りにも、言い訳にもしないためだ。なので、製品にはどこにも「福祉」ということは書かれておらず、都内のスーパーで「恋する豚」を買う消費者は、福祉施設で製造されたことを知らない。
 三つ目は、クリエイターとの協働である。建築家やデザイナー、写真家など、一流のクリエイターをプロジェクトに巻き込んでいる。商品を「市場」で売っていく事業でもあるため単純に商品のデザインが重要であることは言うまでもない

社会が成熟化し、飛躍的な経済成長が望めない時代において、クリエイティブを明らかにすることは、経済的な豊かさだけではない、「幸福感」を考える意味でも重要な視点となる。
 クリエイティビティとは、0から1を

会の分業化とともに、農家もいつしか農産物の生産だけに特化するようになってしまった。こういう分業化の過程は、農業からクリエイティビティを奪っていった過程とも言える。さらに注目しておくべき点は、こうした農業の六次産業化の動きは、農家の所得を増やし、農業に国際競争力をつけようとする動きがその発端だった。しかし、いわゆる「六次産業化法」による国の支援件数は1690件にのぼっているが、農業再生の決め手になっていないと言えよう。つまり、農業の六次産業化によって、短期的な所得の増加や、競争力の向上を見込むことは難しいと言えよう。

が、さらに重要なのは、クリエイターという「ヨソ者」がかかわることによって「ソト」の接点が生まれ、それは従来の福祉という概念そのものを変えていく可能性がある。あるということだ。これらは「市場」によってすべてを解決しようと考えているわけではなく、これまで閉鎖的だった福祉を「ソト」とつなげ、一歩だけ「市場」に近づけていこうとする事業である。さらに付言しておく、恋する豚研究所には多くの人々が食事や買い物に訪れているが、多くの人は福祉施設であることを知らない。

生み出すようなイメージを持たれる人もいるかも知れないが、必ずしもそうではない。文化人類学者のレヴィ・ストロースは、あり合わせのものをうまく使って、自分の手でものをつくる仕事を「ブリコラージュ」と呼んだが、これはまさしくクリエイティビティをめぐる議論にリンクする(レヴィ・ストロース1976)。アメリカの都市経済学者のリチャード・フロリダは、クリエイティビティを發揮するには長い時間を要するとしている。つまり、「ひらめき」というのは、突然でてくるものではなく、長期間準備し試行錯誤した結果だと言える。そして彼は、成熟した社会において、若者は給与よりも、職務内容や職場環境のほうが重要であると考えており、クリエイティブでおもしろいという内発的報酬があることが重要であると指摘している(リチャード・フロリダ2008)。

クリエイティビティは、プロセスの評価が重要であるという(ドミニク・チェン2013)。

いいだ・だいすけ 千葉大学法政経学部福祉環境交流センター研究員、社会福祉法人福祉楽団常務理事、東京農業大学農学部卒業、千葉大学大学院人文社会科学部研究科博士前期課程修了。36歳。

表2 産業分類の再定義

	性質	
第一次産業	“自然”と“人間”が存在する過程	自立 生命としての生存
第二次産業	人やモノを組み合わせて工夫する過程	協働 社会システムの維持
第三次産業	商品として、販売するための過程	交換 利潤の追求

必要であると説明する(コーリン・クラーク1945)。つまり、経済成長を前提としているのだ。

しかも、この産業分類は、産業の外形的な特徴をとらえたものであり、現代における産業構造の内部の変化を十分に反映できない(植物工場のような農業は、第一次産業なのかという問題が生じる)。経済が成熟化し、社会が多様化した現代では、新しい産業の捉え方、分類の仕方が必要になる。

私は、産業内部の持っている性質や過程に注目し、表2のとおり産業分類を再定義した。

こうして分類してみると、「ケアⅡ第三次産業」というような単純な説明はできない。ケアのどの部分が第一次産業的で、どの部分が第三次産業的かといった具合に理解されることになる。

定義において、第一次産業は、自然と人間が存在する過程で、人間が生存と自立のために行う諸活動をベースとした産業であるとした。

イリイチは、著書「シャドウ・ワーク」の中で、人間が生存と自立のために、その地の暮らしたに根ざした固有の活動を「ヴァナキュラーなもの」と呼ぶ。(イリイチ2006)これらを構成しているものは、原材料と労働であり、すなわち、自然と人間である。ケアや農業の原型は、コミュニティの中で助け合ったり、譲り合ったりする互助であり、これらは、自然と人間が存在するうえで発生するものである。

第二次産業は、社会のシステムとして協働し、様々な人やモノを組み合わせて工夫をしていく過程としたい。これらはコミュニティを成立させる過程でもある。前述の恋する豚研究所の事例にもあったように様々な人や社会資源とつながってケアが加工され展開される。これらは、協働や工夫によって社会やコミュニティの維持を図ろうとする過程である。第三次産業は、商品化、販売するための過程とした。売って、貨幣に交換する過程である。これは専ら「市場システム」によって行われる。介護保険によるケア

の提供は、まさにケアを貨幣に交換する過程である。

このような産業分類の再定義を行ったうえで、ケアの六次産業化とは、私の提唱した産業分類の、第一次産業から第三次産業としての性質を統合する働きである。

そもそもケアというものは、家族やコミュニティの中で生存のために自然に行われてきたものである(第一次産業)。そして、さまざまな道具や、他者と関係を持ちながら、その地域や対象者に合わせたケアに加工していく(第二次産業)。これは地域包括ケアの概念とも重なってくるだろう。そして現代においては、ケアは専門家がサービス提供を行い、介護保険制度によって貨幣と交換される(第三次産業)。こうした一連の過程を統合したケア実践を「ケアの六次産業化」と呼ぶたい。

ケアのもつクリエイティブティが発揮されるようにするためには、根源的(内発的)なケアの発生から、多様な主体と協働してケアを加工し、サービスとしてのケアに変換していく過程を介護職自身が必要なのは言うまでもないが、ケアのクリエイティブティを明示していくことによつて、ケアの「評価」のあり方も変わっていくことになる。そして、ケアの六次産業化という視座から「おもしろさ」や「やりがい」を伝えていくことは、介護人材の確保につながっていくと確信している。

おわりに

クリエイティブティは経済的な評価が難しく、「やりがいの搾取」を容易に生み出す危険性を孕んでいる。介護報酬によつてケアを正当に評価していくことが必要なのは言うまでもないが、ケアのクリエイティブティを明示していくことによつて、ケアの「評価」のあり方も変わっていくことになる。そして、ケアの六次産業化という視座から「おもしろさ」や「やりがい」を伝えていくことは、介護人材の確保につながっていくと確信している。

引用・参考文献

- ・イリイチ/玉野井芳郎・栗原彬訳(2006)『シャドウ・ワーク』岩波現代文庫
- ・コーリン・クラーク/金融経済研究会訳(1945)『経済的進歩の諸条件』日本評論社
- ・ドミニク・チェン(2013)『自由文化が創造的な社会をつくる』猪熊純・成瀬友梨編『シエラをデザインする』学芸出版社
- ・ナイチンゲール/薄井坦子訳(1974)『ナイチンゲール著作集第二巻』現代社
- ・広井良典(2009)『コミュニティを問いなおす』ちくま新書
- ・リチャード・フロリダ/井口典夫訳(2008)『クリエイティブ資本論』ダイヤモンド社
- ・レイ・ストロス/大橋保夫訳(1976)『野生の思考』みすず書房

と、それは、誰が行っても同じ結果をもたらすことを意味するし、空間的にも、どこで行われても良いことになってしまふ。農業の六次産業化も同じように考えればおもしろい。農家も、自然と人間が存在する過程で営まれていた根源的な意味での仕事を再認識し、さらに現代における「市場」や「消費者」との結びつきを意識する試みであると言える。六次産業化の意義は、農家が「自分が食べるための農業」や「儲けるための農業」など内部の性質を理解することで、農業の「面白み」をより感じられるようにすることにある。

ケアの六次産業化をすすめていく意義は大きいだろう。介護職が、自らの仕事に「誇り」と「やりがい」を感じられる仕組みをつくることになるからだ。これは、フロリダが、「クリエイティブ産業では、非金銭的な動機が重要になってく」と指摘していることと一致する。

具体的には、介護職が自ら考えて、ア

セスメントからケア提供までを一貫して行えるようにすることが必要だろう。介護保険制度の根幹にかかわる議論となるが、介護支援専門員がケアプランを作成し、介護職がそれを実践するいまの仕組みは、ケアの一番おもしろい部分を介護職から奪ってしまっており、「ケアの六次産業化」を難しくさせる。

また、介護保険の市町村特別給付を活用して、地域の文化とリンクさせたサービス提供の可能性を検討したい。たとえば、私の地元の千葉県旭市では、正月の14日に「団子ならし」という行事があった。これは、その年の豊作を祈念して、枯れ枝に、紅白の団子を飾り付ける行事であるが、近年では、ほとんどみられなくなってしまった。こうした、地域の文化を、「市町村特別給付」と結びつけ、地域ケアや、介護事業として成立させていくことはできないだろうか。これは、ケアの一次産業、二次産業的な意味を再認識させ、ケアの受け手側にとつても、ケアが馴染みのものとなっていく。また、高齢者から若者へ地域の文化を伝えていく場面となる。そして、こういう文化を再発見し、継承する人材として、介護職が期待される。